

一つの提案

大会の運び方にについて

(東京) 福武 道

ベセチーマの担当が、あらかじめ検討されなかつたことを反省されなければならない。そして、時間が短かかつたといううらみもある。

いと感心。

今年のオ三回大会の最も大きい改善は、討論がこれまでにくべて集中的に行われることであつたと思う。そして、それが次年度にまで延長されたことも当然であつたと見える。しかし、前の二回にくべてとかつかりうだけで、安心はできない。討論の内容をふりかえつてみると、会員の会期の参加をみるまでに至らなかつたことがず一に指摘される。報告の質疑のようなやりとりに時間がとられたこととも否定できない。また、討論する

見が出るよう、その結果何らかの問題の解決に到達できるようにしたいと思う。これは無理な注文であろうか。二日が無理だとすれば、来年は本年のつづきであるから、二人くらいの専門研究者に、問題点を整理してもらつて報告をうけ、それを要旨をプリントにして会員に配布しておく。それを見たとして、大会の時間の大部を討論にあてられないものであるか。もちろん、この問題点は、なるべく広い視点から、まだいろいろな角度から指摘されていふことが望ましい。そうすれば、参加者の多数が討論に参加できるからである。

「なあ、二日の会期が無理なばあい、もうひとつ考へるべきことは、本年の報告を早く『平報オ三集』にまとめておき、それが十分に読まれたのちに大会がもたれるように努力することである。来年度のテーマが同じなのだから、とくにそうち。このばあい、「年報オ四集」をどうするかといふことが問題になるが、一度くらいは比較的ひろく投稿できるような題のもとに大会とは離れて原稿を集めらう。以上、大会をより活潑にするための一試案である。会員諸氏の積極的な御意見をききた